

食と客車鈍行

切符を買ったのは出発予定である今日の午後2時だった。いつものこととはいえ、もう少し早く買えないものかと思う。実は今回の3連休（平成8年1月13～15日）で少し気になる事があって、本当に3日間大手を振って行ってよいのか不安だった。それで当日まで買っていなかったのだ。

仕事を終えて家に帰ると親が、

「何時に出るの？」

と聞いてくる。この3連休で東北地方へ行くことは前々から言っておいたものの、いつ出発するかまでは言っていなかったし、まだ決めてもいなかった。

「うーん、今晚か明日の朝一番かな」

「何それ？」

当然といえば当然である。選択の幅があると、こうなってしまう。

「ご飯食べて、風呂は入ってから決める」

実際、夕食と風呂を済ませてから、

「明日の朝にする」

明日の朝一番といえば、「マリンライナー2号」岡山行きだ。3時半には起きねばならない。しかし、明日出ると決まれば、早起きしなくてはならないのに電話を始める始末で、寝たのは結局23時半だった。

3時半、自然に目は覚めたけれど、やはり瞼が重たい。

朝食代わりのスナック菓子を鞆に入れて、呼んでおいたタクシーに乗る。4時すぎに高松駅に着いてコンコースへ行ってみると、既に十数人が待っている。

4時15分くらいにみどりの窓口が開いており、乗車券や特急券を売っている。私もまだ特急券を買っていないし、岡山の10分接続での購入も慌ただしいので、今のうちに買って置く。

ちょうど底冷えのしてくる時間だ。日の出までの間が一番寒い。うどん屋くらい開けていてくれてもいいのと思う。4番線に停まっている「マリンライナー2号」はこれから出る列車だというのに車内が冷えきっている。隣の5番線には1時間後に出る「マリンライナー4号」が停まっているのだが、早くも電気が付いている。2番線の高德線の普通列車はまだ眠ったように停泊している。

4時38分、定刻に発車。もう3割くらいの乗っており、岡山に着く頃にはいっぱいになっているのだろう。みんな早起きだと思う。私がこの列車に乗るのは平成4年の夏以来3年半ぶりだ。こうまでして旅に出る自分を物好きだと思う。

今年の冬は久しぶりに寒い。今までの暖冬と呼ばれた冬とは大違いだが、これでこそ普通の冬のような気がする。今週の始めの1月10日前後は大寒波が降りてきて、北日本は軒並み大荒れだった。この3連休は落ち着くとのことで、足止めを食らうということはなさそうだ。それでも、有事のために余分のお金は持って来てある。

5時50分、「マリンライナー2号」が岡山に着いた。案の定、立ち客が出るほどの乗客を乗せてホームに滑り込んだ。それらの乗客のほとんどは判で押したように新幹線ホームへと向かう。中には小走りの人もいる。私も小走り組の一人だ。

その走った先にあるのは、本日一番に岡山を出る6時ちょうど発の「ひかり100号」東京行きである。これは岡山や高松を朝出て、一番に東京に着く列車だ。だから、乗車率は非常に高い。まずこれに乗って名古屋まで行く。新神戸、新大阪、京都と正に京阪神の駅に停まりながら、まだ大地震の傷跡癒えぬ様子 of 街を走り抜ける。

米原を通過すると、冬の新幹線が遅れるときの代名詞とも言える関ヶ原の雪を見ながら快走を続ける。先日の寒波では大幅に遅れを出していたけど、今日は徐行もせずに8時02分、定刻に名古屋に着いた。ここで「こだま466号」に乗り換えるために一旦降りる。このあとの豊橋での接続が大変いいので、ここで遅れられてはたまらない。ほっと胸を撫で下ろして、ホームに降り立つ。

約20分の待ち合わせのあと、8時21分発。「こだま466号」は名古屋始発で東京まで各駅に停車する。20分の接続で余裕があるとはいえ、1本遅れを出すと、後続にも影響するから油断はできない。三河安城を経て、8時51分に豊橋に着いた。



豊橋駅は現在、工事中で雑然としている。その上、休みなので家族連れや若者など大勢の乗降客で賑わっている。「欲張り信州」で1年半前に豊橋で泊まったときは、工事の気配すらなかったけど、1年半も経てば状況も変わる。

これからが今回の旅の本当の始まりで、まず飯田線に乗る。飯田線といえば、1年半前の「欲張り信州」のときに乗っているし、それ以前にも2度乗ったことがある。今回の飯田線の乗車目的は「伊那路」という臨時急行に乗ることにある。またしても

急行であるが、今回はこの「伊那路」のみである。もっとも、今回の東北行きの主旨からすると、飯田線経由などはその範疇にかすりもしないものだけど、東海道をまっすぐ走るよりも変化に富んでいて、面白そうなので通ることにした。こんな寄り道もいいだろう。

飯田線は今でこそ、定期列車では各駅停車しか走っていないローカル線だけど、かつては飯田線全線を走る「伊那」をはじめ、新宿から「こまがね」、長野から「天龍」という急行が踵を接して走っていたものである。でも、残念ながらそれらは国鉄最後のダイヤ改正となった昭和61年11月までに姿を消してしまった。

それが平成5年の夏から、突如として臨時ながら豊橋－飯田間にこの「伊那路」が走り出したのだ。時々、名古屋発着になることもあり、かなりの人気があるという。それに気をよくしたのか、この春のダイヤ改正では定期の特急に格上げされて、2往復運転になる。飯田線のイメージからすると、のんびり走る急行のほうに合っているように思うけど、JRとしても人気の列車は特急にして収入を増やしたいのだろう。

格上げされる前に乗っておこうと思っ



て、こうやって「伊那路」に乗りに来ただけで、どうせなら名古屋始発のときに乗りたかった。しかし、互いの日程が合わなければ仕方がない。

飯田線の発着する一番駅舎寄りにあるホームにも東海道本線に負けないくらい乗客がいる。これから乗る「伊那路」は165系電車の3両編成に大きなヘッドマークを付けて1番線に既に入っている。このヘッドマークは昭和30～40年台の東海道本線の電車急行に使われていたタイプのもので、古き佳き国鉄を再現している。

編成が短いこともあってか自由席はいっぱいだ。私はこういうこともあろうかと指定券を買っていたので、ゆっくり座ることができた。

9時05分、豊橋発。豊川を渡って、東海道本線と分かれると、のんびりした車窓風景に変わる。牛久保を過ぎて最初の停車駅豊川に停車する。早くも十数人が下車している。豊川辺りだと乗車券より急行券のほうが高いのではないかな。

この駅は1年半前に降りて、豊川稲荷へお参りに行っている。風格のある石造りの駅舎は今でも覚えているが、それが何と改装のために取り壊されている。老朽化するから仕方がないことだけど、落ち着いた雰囲気駅の駅だっただけに残念なことである。

ポイント

それにしても、通過駅にさしかかる度に徐行するのはいかにもまだるっこしい。分岐器がYの字になっていたり、昔のままの規格で高速化がなされていないといったあたりが徐行の原因なのだろう。それでも急行なので、終点飯田までの所要時間は普通列車より1時間ほど早い。

周りは田んぼや畑ばかりで遠くに山が見えるという単調な景色が続く。豊橋平野の東の端の細長いところを豊川に沿って走る。新城を過ぎると、だんだん狭まってきた。

本長篠を出るとにわか山の中に入り、温泉宿が数軒見えて9時53分、湯谷温泉に着いた。10人くらいが下車していったが、穴場といった雰囲気でのどかそうだ。半分は湯治客のように見受けられる。以前来たときも降りたいと思ったものだが、なかなか実現しない。周りは少し雪が残っている。

しばらく鳳来峡を右手に見ながら、中部天竜まで30分近くをノンストップで走る。急行で30分も停まらないというのは珍しいことだ。それがまた、かつての急行全盛時代を彷彿とさせる。今では特急ですら細切れ停車ばかりで、「準急」などと陰口を叩かれる始末である。

天気はよく、雲ひとつない見事な晴天だ。この分だとこれから控えているアルプスの山々がよく見えるだろう。

寒波が来たとはいっても、この辺はあまり雪は降っていないのだろうか、右手に心なしか水量の少ない天竜川が見えてきて10時21分、中部天竜着。地元の人が5、6人下車する。駅前の佐久間レールパークは冬の間は休業なので、鉄道ファンと思われる人の姿は見られない。

みさくぼ

以前は木材の運搬で賑わったこともあり、この辺では比較的大きめの水窪、平岡に停車して、それぞれわずかな客が降りている。駅毎に利用があるというのは臨時列車とはいえ、地元の人々の足として飯田線に根付いている証拠だ。地域密着の見本のような列車である。

11時24分、天竜峡に着いた。ここは飯田線のなかでも観光要素の多い駅で、温泉や舟下りと事欠かない。ここで50人以上は降りていったように思う。団体客ばかりだ。これから昼食を挟んで、舟下りを楽しんだ後、温泉に投宿といったところだろうか。

20分弱走って天竜川から離れると、11時41分定刻に飯田に着いた。臨時にもかかわらず、行き違いのための停車のみで客扱いをしない運転停車が一つもなかったのは立派だ。

降りてホームに立つ。さすがに飯田線の中心駅だけに大きな駅だ。乗り場は3つあり、側線も多い。1年半前に来たばかりなのに、改めてそう感じる。

次の列車まで1時間弱あるし、時間的にもちょうどいいので、これから昼食を摂ろうと思う。この辺は伊那蕎麦の美味しいところだが、どういう店があるのか分からない。適当に周辺を歩いてみることにする。駅前を商店街が真っすぐ東へ伸びている。人通りも車の通りも多く、伊那の小京都たる所以である。

駅前の信号を渡って、そのまま駅前商店街を東へ向かって初めの角だったと思うが、北に入ると手打ちの蕎麦屋があったので、迷わずそこへ入った。

そう広くない店だが、6つ7つあるテーブルが全部ふさがっている。2階にも部屋があって、人数の多い客は上へ通されている。時間が時間だけに領けるが、これは期待できそう。

ガイドを頼りに美味しい店を訪れるのもいいが、予備知識なしに店を探して賞味するのもまた楽しい。私はしょっちゅう讃岐うどんの未知の店を探しては食べ歩いている。当たり外れは当然あるが、そこが面白い。レールの上ばかり走るのが能ではあるまい。

私は1人なので、他の客と相席ということになった。普段は相席はあまり好まないのだけど、関心は蕎麦に移っているので、1人だろうが相席だろうが何でもいい。さっそくざる蕎麦を注文した。

蕎麦を待つ間にお品書きを見る。国内産か、もっと限定的に長野県産の蕎麦粉のみを使用していて、それを自家製粉して生粉を打ってあるということだ。それゆえ作り置きなどはなく、ましてや土産用もない。また、蕎麦の風味を楽しんでもらうためにと海苔はかけないとある。

しばらく待って、いよいよ出てきた。二八蕎麦ということだが、そう黒くない。麺は細いながらも腰があり、つやつやしている。だしは見た目は濃いけど、薄味だ。薄味だが、腰の強い麺をしっかり受けとめている。なかなか美味しい。いい店を見つけた。ただし、次に来るときにこの場所を覚えているかどうかは疑わしい。

次は12時35分発の上諏訪行き快速だ。飯田線の快速といえば、「みすず」だが、「みすず」とは名乗っていない。でも、その間合い運用なのか、シートは新幹線のものが使われている。大勢の地元の人とわずかな鉄道ファンを乗せて出発。飯田まで乗ってきた「伊那路」では車内はむっとりしていて静かだったけど、こちらは一転してにぎやかだ。言葉も信州訛りになっている。



この辺になると沿線の風景もりんごの木が目立つようになり、長野県を走っていることを実感する。時期的にりんごの収穫は終わっているので木は丸坊主で、田んぼも切り株だ。農閑期ならではの風景で、本来なら寒村然としていて寂しいはずなのだが、今日のように青空の広がるまるで春先のような陽気だとまったくそれを感じさせない。どこが冬なのだろうと錯覚を起こしてしまうほどだ。

右手遠方には南アルプスの塩見岳、荒川岳、赤石岳、左手には眼前いっぱい

木曾駒ヶ岳が広がる。その中を右に左にカーブしながら快走している。

どの辺からだったか、いかにもパートタイマーといった感じの女性がスーパーの買い物かごを下げて弁当を売りに入ってきた。車内販売である。いくら通過駅のある快速列車とはいえ、JRの定める列車種別としては普通列車であるから驚きだ。全区間ではないだろうが、ちょっと嬉しくなる。私がこれまであちこち旅をしてきたが、普通列車で車内販売に出会ったのは、5年前に東北の釜石線に乗ったとき以来2度目のことだ。

市田辺りから天竜川と再会したと思ったら伊那大島でまた別れる。しばらくはこの繰り返して結局、再び沿うのは伊那市の手前付近からである。

ところで、列車は徐々に登っていて、飯田を出たときには標高400メートル辺りだったけど、伊那大島で500メートル、飯島になると650メートルくらいのところを走っているようである。それなのに雪は逆に減っていて、むしろなくなりつつある。ここまで飯田線に乗ってきたけど、全体に雪は少なめだ。新幹線の車窓から見た関ヶ原の雪のほうがよく多いと思うくらいだ。駒ヶ岳に遮られて、雪は降らなかったのだろうか。

大きい駅では大量に、小さい駅でもばらばらと乗客の入れ替わりがあり、13時47分に伊那市に着いた。ここでも大勢入れ替わる。つい降りて蕎麦でも食べたくなる。伊那市も蕎麦が有名なので、美味しいお店はいくらでもあるだろう。

私は飯田線には今回で4度目の乗車となるけど、伊那市には実は一度しか降りていない。そのうちの一度は全線を通しで乗ったから降りようがないけど、今回を含めたそれ以外の3回では1回だけ降りている。到着する度にもう少しゆっくり散策してみたいと思う駅ではあるけど、これがなかなか実現しない。次は伊那市や駒ヶ根辺りを中心に据えて来てみたいと思う。

飯田線内最後の停車駅の伊那松島も大きい駅で機関区があり、変電所もあり、電車も2編成停まっている。その一角でEF58やED62などの電気機関車の展示をしていて、カメラを向ける鉄道ファンがいる。何かのイベントらしく、かなり盛況のようだ。突然、このような行事に遭遇しても予定が決まっているので対応ができない。もっとも、行程に余裕があっても、後々のことを考えたりするので、降りたかどうかは疑わしい。

それにしても、この快速列車は停車駅が少ない。まるで急行のようだ。所要時間もかつての急行だった頃と差はないのだろう。沿線人口が少ないからかもしれない。それにそもそも飯田線は元は私鉄だったこともあって駅間は短いから、これ以上停車駅を増やすと普通列車との所要時間の差がほとんどなくなってしまおうという事情もあるのだろう。

列車はさらに登って、標高700メートルを超えているようだ。周りの田んぼもだんだん狭まってきた。宮木を出るとJR東日本に入って、天竜川の支流の細い流れを渡り、左から中央本線が合流して、14時17分辰野着。構内は広く、電気機関車が貨車をつないでいくつか停まっている。

初めて飯田線に乗ったとき、この辰野で泊まろうかと思ったが果たせず、結局、小淵沢の駅舎で寝たことがある。そのときは夜行急行の「アルプス」に乗って辰野へ引き返して、飯田線の一番列車に乗っている。辰野発が4時50何分だった。待ち時間は1時間強でとても「接続」とは言い難いのだが、そういう乗り継ぎをしたことがある。旅館やホテルに泊まるよりお金がかからないとはいえ、真冬のことで、さすがに寒かった。学生の頃の飯田線初乗りの話で、全線を通して乗ったのはこのときのことである。

発車ベルがメロディーになったので、JR東日本に入ったことが分かる。6分停まって14時23分発。川岸を通過して今度は同じ中央本線でも、みどり湖経由のバイパス線と合流して岡谷着。ここでも6分停車とのんびりしている。この辺りは単線なので仕方がない。

新宿からの「あずさ63号」との行き違いだ。見たところ、「あずさ」はあまり混んではないようだ。14時38分発。

この列車の終点上諏訪の一つ手前の下諏訪で降りる。これから温泉につかろうと思っている。

出発前、この下諏訪か次の上諏訪かどちらに入るかで迷った。一方は中山道沿いの静かな宿場町、また一方は諏訪湖に面したホテルの立ち並ぶ大観光地で、どちらもそれぞれに魅力があって、どうしようかと思ったが、今回は下諏訪ということにした。それに温泉に入るだけが目的の人間が観光要素の強い上諏訪へ行って指をくわえて早々に去らねばならないというのは、ちょっともったいないという気持ちもある。

さて、列車から降りて改札を出ると、地方へ行くとよく見かける駅前風景が広がっている。「ようこそ下諏訪温泉へ」のアーチの看板が旅行者を迎えてくれる。駅前にある案内図を見て、見当を付けて共同浴場のあるところへと歩く。

10分くらい歩くと、旧中山道の旅館街の中に件の共同浴場があったので暖簾をくぐる。何と入湯料は180円である。東京の銭湯だと倍くらいは取られるし、我が高松でもやはり300円以上はかかる。温泉街の共同浴場は概して安いので、つい入りたくなる。営業時間は5時半から22時なので一日中いつでも入ることができる。

浴槽は広くはないが、銭湯らしく天井は高いので解放感に浸れる。湯舟に入ると、温度はそう高くはないのだけど、動く度にぴりぴりと肌を刺してくる。しかし、入ってしまうと湯加減はいいので気持ちがいい。傍らでは、こういうところでよく見かけるお湯の出るライオンの頭が湯舟のほうを向いており、その口からお湯が注がれているが、白華現象で周りを白い固まりが覆っていて、ライオンの顔には見えなかった。

風呂から出て、散策を始める。旧中山道の本陣遺構というのがあって、明治13年6月24日に明治天皇が巡幸の際にここで御休憩されたという。当時はまだ鉄道はほとんど敷かれていなかったのだから、当然牛車とか駕籠での移動だったのだろう。歴史の上ではほんの115年前の話だけど、今ではとても考えられないことだ。

せっかく下諏訪に来たので近くの諏訪大社へ行く。そういえば、私は年が改まってから、初詣をしていない。元旦に行こうと思いながら行きそびれていたのだから、ちょうどいい機会だ。こんなついでのようなお参りでは神様に怒られそうだ。鳥居をくぐると、立派なお社が現れる。参拝客も何人かいて、一緒にお参りをする。



駅に戻って、予定より1本早い茅野行き

の普通列車に乗る。これで隣の上諏訪まで行って、「あずさ」に乗り換える。右手に諏訪湖を見ながら、4分で巨大なホテルの並ぶ上諏訪に到着。下諏訪とは大違いだ。ここでほとんどの乗客が降りる。「あずさ」を待つ間、今晚お世話になる千葉在住の友達の友人の新井君への土産を買う。

それにしても風呂から出て30分は経つというのに、まったく湯冷めをしていない。それだけ芯から暖まったのだろう。そういう効果があるのかもしれない。

16時25分、「スーパーあずさ6号」新宿行きが入ってきた。この列車は「あずさ」のなかでも一番の速達タイプでこのあと茅野、甲府、八王子にしか停まらない。わずか2時

間余で新宿に着いてしまう。そんな便利な列車なのに自由席は少なく、席はほとんど埋まっている。幸い私は一人なので、何とか空いている席を見つけて座ることができた。スピードが魅力の「スーパーあずさ」だが、私の好きな小淵沢を通過するのはちょっと気になる。

この「スーパーあずさ」は新型の車両で車内はきれいで明るい。前後のシートの間隔も広くゆったりしている。スピードは速く、カーブではかなり体が振られる。体が振られるのは、振り子式車両だからある程度は仕方がない。

いつもなら中央本線はゆっくり山を眺めたいという理由で、たいていは普通列車にばかり乗っているのに、この辺で「あずさ」に乗ることは滅多にない。普通列車とは全くスピードが違うから、山容の変化の速さに驚かされる。

左に雪化粧をした八ヶ岳が見える。信州の日の入りは高松よりは当然早く、もう雪山がオレンジ色に染まっており、スキー場のゲレンデはライティングされている。右には南アルプスが見えるけど、もう昼間のようにはっきりとは見えない。いずれの山も背の高いゴツゴツした、いかつい印象で、いかにも男性的な山ばかりだ。

小淵沢を通過する辺りから富士山が見えだしたので、撮影しようと思ってデッキに出ただけで、列車は右に左にカーブを繰り返して、うまい具合にファインダーの中に入ってくれない。しかも、日が暮れてきてだんだん暗くなっている。10分ほど格闘した末になんとかカメラに収めることはできたが、うまく撮れたかどうかは疑わしい。そうこうするうちに、もう甲府が近づいてきて富士山は見えにくくなり、うやむやのうちに撮影は終了となってしまった。

「スーパーあずさ」はカーブなどものともせず、高速で曲がっている。一番速い列車で新宿ー松本間が2時間半である。ほんの10年くらい前まではもう1時間は余分にかかっていたように思う。近くの沿線の木々などあまりに速くて、はっきり捉えることができない。景色の全てが飛ぶように去っていく。

甲府で大量の下車があったが、同じくらい乗ってきて相変わらずの混み具合だ。ここにいる人のほとんどが新宿まで行くのだろう。17時過ぎだが、辺りはもう暗い。しばらく走って夕暮れの甲府盆地が見えてきた。ちょっと寂しげなのは、街灯やネオンが少ないからかもしれない。列車からも見える甲府盆地は甲府から少し東に行ったところになるので、寂しげなのもやむを得ない。

このあと大月を過ぎてからは寝てしまい、気が付くと三鷹とか荻窪といった駅名標をかすめている。もっとも起きていたとしても窓外は真っ暗だから何も見えないのだろうけど、寝て過ごしたのは何だかもったいないような気がする。大月から三鷹といえど長い距離ではないけど、そう思う。

終着のアナウンスが始まると、乗客は一斉に荷物を下ろし始めて急に車内がざわつき出した。そうして、日もとつぷりと暮れた18時36分、新宿に到着した。

これからは新井君の言われるままに最寄り駅へと向かった。駅に着いたら電話するようにと言われていたけど、住所が分かっていたし駅から近いという話だったので、番地を元に探すことにした。見当が外れて少し時間がかかったが、無事たどり着くことができた。会社の寮である。寮と言うより、会社が管理会社から借り上げて社員に提供しているマンションのようだ。

入ってみると、会社の同僚と談笑している。おやっと思ったが、会社の寮ならあり得ない事ではない。

「よお、久しぶり」

「駅着いたら電話せえ言うよったやんか。それにしても、ようここが分かったな」

「いや、駅から近い言うし、住所の番地で見当付けたら、来れた」

これは私の特技ともいえるもので、初めて行くところでも「見当を付けて」いれば、大体すんなり行くことができるのである。10年前の無いに等しい記憶を頼りに松山の叔父の家に行ったり、山口の楠君の下宿へ初めて行った際にも概要を教えてもらっただけで行ってしまったりして、先方を大いに驚かせたことがある。旅先で銭湯を探すのも概してこの手である。

「飯は？」

「まだ、食べてない」

「なら、俺もまだやし、外で食うか」

ということで、彼の部屋にいた同僚ら計5人で駅の高架下にある大衆食堂へ行った。

本当は酒を酌み交わしたかったが、彼は前日やりすぎて今夜は勘弁してくれ、ということなので、酒抜きの食堂へ行くことになったのだ。

どんなことを話したか、はっきり覚えていないけど、讃岐うどんや瀬戸大橋といったお国自慢やら仕事の話などをした。ただその中の一人が、

「なんか関西弁っぽい話し方ですね。しゃべり方がやさしい感じに聞こえる」

と言う。これだけははっきり覚えている。

「普段はこてこての讃岐弁なんやけど」

その人の指摘どおり、旅に出るとなぜか関西弁のようなアクセントの話し方になる。学生時代、地元の大学に通っていたにもかかわらず、周りに関西人が多かったのも影響しているのか、「関西弁のような」しゃべり方になったりする。それに人に話し掛けるとき入り込みやすいというのもある。仕事をしていても時々その傾向が見られる。その代わり、友達と話をするときは全くの讃岐弁だ。しかも、近頃は中年以上の人しか使わないような言葉も使うからかなり重症だ。

2時間近くを楽しく過ごして、寮のほうへは22時頃戻った。それからは新井君と旧交を温めた。最後に会ったのが大学4年のとき、当時新潟の柏崎で下宿していた彼のアパートで一晩泊めてもらって以来だから2年半ぶりだ。高校時代の連中はどうしているか、仕事はどうかとか話していると、0時になった。

「どこかスナックでも飲みに行くか？」

と彼が言うので、

「おお、ええの」

酒は勘弁してくれ、などと言っていたのはもうどこかへ行っている。時間は遅いけど、スナックくらいなら開いているだろう。と思って外へ出たのだが、なかなかよさそうな店がなく、散々歩いて2時頃戻った。また次の機会に譲ることにしよう。こうして、早朝から起きて回り道をしながら関東へ入った初日は幕を閉じた。

「食と客車鈍行」の続きを読む